可能性を引き出す子育てを

「ヨコミネ式教育」講演会

「ヨコミネ式教育」の発案者・横峯吉文（よしふみ）さんの講演会（内子町商工会青年部主催）は２月14日、内子町共生館で開かれました。横峯さんの保育園では、園児が卒園までに約1,500冊の本を読み、逆立ち歩きができるようになるなど、独自の教育法が注目を集めています。横峯さんは「10歳までに心の力・学ぶ力・体の力は飛躍的に伸びる。可能性を最大限に引き出してあげて」と呼びかけました。会場には子育て中の人など約400人が集まり、関心の高さを示すかのように数多くの質問が出されていました。

子どもの教育について熱く語る横峯さん

自転車用の夜間反射板を寄贈

五十崎ブロック駐在所連絡協議会

五十崎ブロック駐在所連絡協議会（久保徳太郎（とくたろう）会長）は、子どもたちが夕暮れ時に自転車を運転する際の交通安全に役立ててもらおうと、自転車に付ける反射板を管内すべての小・中学生に贈ることとし、２月17日に天神小学校で贈呈式を行いました。

久保会長は、「協議会では、交通安全と犯罪防止のために定期的なパトロールや啓発活動を続けています。これからも地域と連携し、子どもから高齢者まで安全に暮らせる町にしたい」と語っていました。

久保会長から反射板を受け取る天神小学校の児童たち

100円玉を持って買い物に行こう

第２回うちこ100円商店街

商店街全体を会場に、各商店などが軒先にさまざまな商品を並べ100円で販売する「第２回うちこ100円商店街」（同実行委員会主催）が３月５日、内子商店街で開かれました。

同商店街の店舗を中心に、76の団体や個人が出店。店の味や特徴を知ってもらおうと、それぞれ自慢の一品料理やスイーツ、目玉商品などを並べて、訪れた人たちと会話しながら楽しそうに販売していました。

今回は、100円商店街にちなんだ絵手紙や絵馬を募集するコーナーなど、新しい企画も登場し、子どもから大人まで多くの買い物客でにぎわいました。

実行委員長を務めた宮瀬貴久（よしひさ）さんは、「お客様に商店街に足を運んでもらい、各店舗に気軽に入ってもらえるような縁をつくることが一番の目的。この催しをきっかけとして日頃から商店街に来てもらえるように、地道に長く続けていきたい」と語っていました。

▲晴天に恵まれ大勢でにぎわった「第２回うちこ100円商店街」
▶実行委員会では、次回に向け景品付きのアンケートも実施

野球少年・野球少女に夢を

愛媛マンダリンパイレーツ野球教室

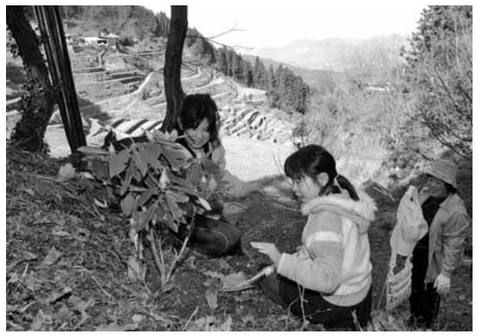
愛媛マンダリンパイレーツ野球教室（内子町教育委員会主催）は２月26日、内子運動公園総合グラウンドで開かれ、町内のソフトボールクラブに所属する子どもら59人が参加しました。球団からは近藤幸志郎（こうしろう）キャプテンをはじめ６人が参加。子どもたちは憧れの選手に野球の基礎などを学びながら、触れ合いを楽しんでいました。

◀選手の指導に熱心に耳を傾ける子どもたち

棚田の景観に彩りを

泉谷地区の棚田でシャクナゲを植栽

泉谷地区棚田を守る会（上岡満榮（みつえ）会長）は２月27日、恒例となったシャクナゲの植栽活動を行いました。平成17年以降、これまでに約600本を植栽。この日は御祓自治会や五十崎緑の少年団などから40人が参加し167本の苗木を植えました。上岡会長は「地域資源の象徴となるように続けていきたい」と話していました。



◀「きれいに咲いてね」と、１本ずつ丁寧に植栽

日頃の備えで火災を防ごう

火災予防強化週間啓発活動

大洲消防署内子支署（冨永修身（おさみ）支署長）は３月１日、火災予防強化週間にあわせて、町の女性消防団員と共同で防火活動を行いました。この日は町並保存地区内の家庭10件を訪問。今年の５月までに各家庭で設置するよう義務付けられている火災報知器のことや、火の取り扱い方法などを説明し、注意を促しました。

◀それぞれの家庭の状況に合わせて注意する点などを指導

交通死亡事故アンダー60を目指して

交通安全街頭活動「人の輪作戦」

内子交通安全協会（稲本隆壽（たかとし）会長、大洲警察署内子交番ほか共催）は３月４日、同交番前の国道56号線で交通事故防止を訴える「人の輪作戦」を行いました。

同作戦は、昨年に比べ交通死亡事故者が多く発生していることから緊急対策として実施。参加した45人がずらりと沿道に並び、運転手に安全運転を呼びかけました。

◀交通安全を願い、プラカードやのぼりを手に沿道に立つ参加者

食べることは、生きること

内子町人権・同和教育研究大会

「平成22年度内子町人権・同和教育研究大会」（内子町教育委員会、内子町人権教育協議会主催）は３月５日、内子町共生館で開かれました。

はじめに、「平成22年愛媛県小学生人権メッセージコンテスト」で奨励賞を受賞した力石真司（しんじ）くん（御祓小５年）が、「これからも、おじいちゃん、おばあちゃんと楽しく暮らし、明るい笑顔が見たい」とメッセージを発表。続いて、福岡県を中心に助産師・思春期保健相談師として活躍する内田美智子（みちこ）さんが「いのち」をテーマに講演を行いました。内田さんは、「食卓の豊かさが子どもたちを育む。食べることは生きること。毎日の食卓を通して、子どもたちは“自分は大切に思われているんだ”と感じる。その記憶が、将来の生きる力になる。命を育む大人としての役割を、いま一度見つめ直して」と訴えました。助産師としての体験を交えた話に、参加者の多くは、時に涙を流しながら聞き入っていました。

▲大きな声で人権メッセージを読み上げる力石くん　▶厳しくも温かさが伝わる語りで、「いま大人に考えてほしいこと」を説く内田さん

豊かな森を育てよう

内子の森づくり

「第17回内子の森づくり」（内子町、愛媛新聞社共催）は３月５日、内子運動公園で開かれました。

内子町は、「エコロジータウン内子」を目指す取り組みの一つとして、これまでに町内16カ所で植生調査に基づいた照葉樹の植栽活動を行っています。今回は、平成５・６年度に活動を行った同公園内で、樹木の手入れや、新たな苗木400本の植栽を実施。参川小学校緑の少年団や廿日市自治会のメンバーをはじめ、町内外から約130人が参加し、作業に汗を流しました。

「10年後にはどれくらい大きくなってるかな」

地域を災害から守るために

町内自主防災会が災害図上訓練に参加

災害図上訓練を用いた地域防災力強化研修が３月８日、愛媛県南予地方局で開かれ、城廻および神南自主防災会の役員が参加しました。災害図上訓練は、大きな災害が発生した場合を想定し、地図への書き込みを通して、参加者全員が主人公となり対応策を考える訓練です。今回は第１段階として、地図に自然条件や防災資源などを書き込む作業を行いました。参加者は「この地図情報をもとに、南海地震に備えて自分たちの自主防災会でさらに議論を深めたい」と話していました。

地域の実情を思い浮かべながら、地図に情報を書き込む

第13期（後期）内子町知的農村塾

第13期の講義内容を紹介します。詳しくは、お問い合わせください。

【問い合わせ】　産業振興課　農村支援センター　☎0893（44）2199

第１回　１月14日

講師
久留飛富士恵（ふじえ）さん
◉プロフィール
広島県尾道市で年間に干し柿４万個、柿酢２千本などを製造販売する、77歳の現役農業者

講演会をきっかけに、55歳で柿と出会った。50本の柿の木から始まり、今では40アールの畑に200本以上を育てている。

最初は渋抜きだけだったが、その後多くの人の協力を得て、商品として提供できる柿酢を完成させることができた。柿酢は、飲んでもいいし、料理にも使える。また高血圧予防や抗アレルギー作用、抗酸化作用などの効果があるとされる。健康志向の人たちの間で人気が高まっており、今後も健康志向の新商品開発に力を入れていきたい。

第２回　１月27日

講師
三浦　俊荘（しゅんそう）さん
◉プロフィール
大分県清川村職員として産業振興に尽力。現在、清川ふるさと物産館「夢市場」館長

清川ふるさと物産館「夢市場」は、出荷者230人のうち95％が75歳以上。このまま放置すれば将来は会員数が減り、品物の確保も難しくなることから、農産物を自ら生産する直営農場を整備。野菜、果樹などを栽培すると同時に、地域農業の体力を取り戻すため新規就農者の支援に力を入れている。

これからは、直売所もただ農産物を売るだけでは成長できない。農業の担い手を育成し、地域農業の発展に貢献していかなければならない。

第３回　２月８日

講師
江口　祐輔（ゆうすけ）さん
◉プロフィール
神奈川県生まれ。近畿中国四国農業研究センター鳥獣害研究チームで主任研究員を務める

鳥獣被害、特にイノシシの捕獲頭数が年々増えている。それは山にいるイノシシばかりを捕まえて、田畑周辺にいるイノシシを捕獲しないからだ。

イノシシ対策で一番重要なのは、イノシシが嫌がる環境をつくること。例えば、餌となる残飯を山に捨てない、農作物はできるだけ見えないようにする、草を刈りイノシシが身を隠せる茂みをなくす、など。電気柵も適切に設置することが大事だ。動物の習性を理解することが非常に重要である。

第４回　２月22日「討論会」

◎テーマ　「内子町農業の再生を考える」
◎進行　鈴木　茂（しげる）　松山大学経済学部学部長
◎パネラー　稲本隆壽（たかとし）　内子町長
稲荷　亨（とおる）　ＪＡ愛媛中央会農政担い手対策部長
阿部憲三（けんぞう）　㈲漂流岡山代表取締役
大程久壽男（くすお）内子町認定農業者協議会代表
◎事例発表　井上勝幸（かつゆき）　四国たばこ耕作組合理事

21年度の内子町の農林業生産額は約33億円。５年前の80％に低下し、特に葉たばこは最盛期の16％に落ち込んでいる。これらは担い手不足や販売価格の低迷などが要因。国産品の需要が年々高まる一方、農家が減り品薄になっているため、可能性がある。販路をしっかり築くことが大切。これからの農業は、作物を作るだけではいけない。高次元産業としての総合農業を目指そう。